発問・課題設定をキーに見る

主体的・対話的で深い学び 授業実践

英語

縮約版の活用と多様な表現活動で、幅広い学力層を伸ばす

青森県立三本木（さんぼんぎ）高校・附属中学校

坂岡優子 さかおか・ゆうこ

同校に赴任して7年目。
グローバルサイエンスコース事務局主任。英語科。

学校概要

◎設立　1926（大正15）年　◎形態　全日制／普通科／共学　◎生徒数　1学年約240人
◎2022年度卒業生進路実績　国公立大は、弘前大、東北大、筑波大、千葉大、東京工業大、東京大、青森県立保健大、青森公立大などに84人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ263人が合格。

私が目指している授業

私は高校時代、当時の大学入試を意識した英語を中心に学んだこともあり、英語を聞くことや話すことがうまくできず、英語を使うことに苦手意識を持っていました。そのため、教師になってからは、生徒が英語を使えて、楽しい、役に立つと思える授業を目指してきました。本校の生徒は学力層の幅が広く、進路も多様です。すべての生徒が将来、英語を使うとは限りませんが、仕事で英語が必要となった時などに、自分で学びを深めていける英語の基礎力を育みたいと考えています。同時に、地域から期待されている進学校として、大学入試で求められる英語力も身につけられるよう、英語科全体で足並みをそろえて指導力の向上に努めています。

授業リポート

本時の概要

［対象］2年生　［教科・科目］英語・英語コミュニケーションⅡ
［単元］Language Change Over Time
［テーマ］言語の経年変化
［単元目標］言語の変化の例とグループ発表のやり方を学び、自分が興味を持った言葉の変化を調べてグループ・ディスカッションを行う。
［授業時数］全 12 時間のうちの4時間目

DOWN LOAD 単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/ または右の2次元コードからアクセスしてください。

ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介！

1 キーフレーズを確認　10分間

坂岡先生は、本時の目標が単元末に行うディスカッションに必要な表現を身につけることと、単元の要旨についてリテリングができるようになることだと説明。そして、前時までの復習として、左に英語、右に日本語が書かれたワークシートを使い、本単元のキーフレーズをペアで発音し合って確認した。

2 音読活動1・2　15分間

素材文の縮約版（P.19 コラム参照）を使い、読む速さをペアで競うスピード・リーディングと、ペアの相手の縮約版にペンを２本置き、英文の一部を隠した上で読むペン・リーディングを行った。同じ英文を飽きずに楽しく読む工夫として、活動にゲーム性を持たせている。生徒の声はだんだん大きくなっていった。

3 音読活動3・4　7分間

キーフレーズの箇所が日本語になっている縮約版を活用し、日本語を自分で英語にして音読する活動をペアで行った。次に、個人で３分間、縮約版を読んだ後、縮約版を見ずに音読するリード＆ルックアップの活動を行った。最後に行うリテリングに向けて、集中して練習する生徒が増えた。

4 リテリング　18分間

指定の12のキーワード･フレーズを用いるリテリングを行った。準備５分間、練習２分間の後、ペアでリテリングをし合い、相互評価をした。キーワード・フレーズを８個以上使うとA、４個以上７個以下はBとなるため、生徒はペアの相手の発表を注意深く聞いた。最後に､自分のリテリングをワークシートに記入した。

発問・課題設定の観点

素材文の縮約版で英語の活用力と内容理解力を高める

本校では、英語の素材文の重要な部分を抜き出してつなげた「縮約版」を作成し、それを基にコミュニカティブな活動を行う「三本木メソッド」（**コラム参照**）を全学年で実践しています。1・2年次は、生徒が英語を使う喜びを感じられることを大切にし、英語4技能を用いた活動を多く取り入れているのも特徴です。

単元の前半は縮約版を繰り返し音読する中でキーフレーズを習得し、内容を理解します（**図1**）。その際、重要表現を徹底的に読み込み、概要を把握するため、単元の中盤に行う素材文全体の読解では、英語が苦手な生徒もスムーズに読み進めることができます。

単元の後半には、素材文の内容を踏まえた探究的な学びを行っています。本単元では、言語の経年変化という素材文の内容に合わせて、各自が英単語を選び、語源やその後の変化を調べてきた上で、4人1組で発表を行う予定です。

図1 本単元の流れ

英語が苦手な生徒が楽しく学べる工夫

1～4時間目◎縮約版を使った活動
縮約版を使った様々な活動を通して、キーフレーズを習得し、素材文の内容を理解する。
▶**素材文の読解・単元末のディスカッションに向けた土台作り**

5～8時間目◎素材文全体の読解
拾い読みをするScanningや指定された英文を探すSentence Huntなどの活動を通して、長めの英文を速く読む練習を行う。
▶**素材文の内容理解、知識の確認と定着**

9時間目◎ディクテーション
素材文全体を聞いて、英語で書き取る。
▶**発表・ディスカッションに向けて必要な表現を再確認する**

英語が得意な生徒が、英語力をさらに伸ばせるような表現活動の充実

10時間目◎探究的な学び
自分が関心を持った言葉の語源や変化を調べ、素材文の流れを参考に、英語で発表する準備を行う。
▶**グループ内発表に向けた準備**

11時間目◎グループ内で発表
4人1組で、各自が調べた言葉の変化を発表する。
▶**ディスカッションに向けた準備**

12時間目◎グループ・ディスカッション
「誰が調べた言葉が面白いか」をテーマにディスカッションする。素材文の展開と同じように、相手の発言を受けて、自分の考えと理由を述べる。
▶**対話の型を身につけ、他者の意見を聞き、視野を広げる**

※学校資料を基に編集部で作成。

学習評価の工夫

表現活動を楽しめるよう、生徒の相互評価を重視

定期考査では、授業に真面目に取り組めば点数が取れることを生徒が実感できるよう、授業で最も時間をかけて学ぶ縮約版の内容を多く出題しています。

ペアワークでは、生徒が表現活動を楽しめるよう、相互評価を取り入れています。本時のリテリングの課題では、指定された12のキーワード・フレーズのうち8個以上使っていればA、4個以上7個以下はB、3個以下はCを評価基準とし、ペアの相手のワークシートに感想を書くようにしました。生徒は、相手がキーワード・フレーズを使っているかをしっかり聞き取って評価するとともに、「分かりやすかった」などといった感想を書いて健闘をたたえ合っていました。

本単元末に行うグループ・ディスカッションでも、話すこと（やり取り）のルーブリック（**図2**）を用いて生徒同士で相互評価を行います。

授業では、文法や単語などの正確性にはあまりこだわっていません。生徒が活動に積極的に参加していることを重視し、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、教師が授業観察を通して行っています。文法や単語などの正確性については、単元末に生徒が提出するリテリングの動画やライティングのワークシートで評価しています。

図2 ディスカッションの評価基準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	適切な語彙・表現を使っている	相手の話の内容を受け、その内容を自分の言葉でまとめてから、自分の意見を述べている	自分の考えを聞き手に伝わるように話している
b	語彙や表現に多少の誤りはあるが、理解できる程度の誤りである	相手の話の内容を受け、そのことに触れてから、自分の意見を述べている	自分の考えについて、多少伝わりにくい部分はあるが、理解できる程度である
c	理解に支障のある語彙・表現である	相手の話を踏まえずに自分の意見のみを述べている	自分の考えが聞き手に伝わらない

※学校資料を基に編集部で作成。

「シン 三本木メソッド」で、学力層に応じた指導を実現

本校が縮約版（Shortened Version）を軸とした「三本木メソッド」を開発したのは、2016年度に文部科学省「英語教育改善プラン」の指定校となったことがきっかけでした。それまでは英文和訳が中心の講義型の授業でしたが、生徒が4技能を使う活動中心の授業へと転換しました。

●縮約版で素材文を4分の1の分量に

縮約版は、素材文から重要な英文を原文のまま抜き出してつなぎ合わせたもので、学年で統一して活用しています。縮約版の英文の量は素材文の4分の1程度になるので、英語が苦手な生徒が取り組みやすくなります。要約ではなく縮約とするのは、要約して書き換えた英文だと、生徒は素材文とは違う英文を読んでいるという感覚を持ってしまい、負担感が増すからです。

●文法事項はワークシートを活用し、家庭学習で習得

重要表現はワークシートにまとめて、単元の開始前に生徒に配布し、必要に応じて確認できるようにしています。また、文法事項は授業では解説していません。文法事項を解説したワークシートを配布し、生徒は家庭学習で取り組んでいます。

●縮約版で様々な音読活動をしてから素材文を読解

生徒は、縮約版を繰り返し音読する中でキーワードやキーフレーズを頭に入れているので、素材文全体を読む時に分からない単語などがあっても、推測しながら読み進めることができています。

●学力層に応じて活動の量や難易度を変える

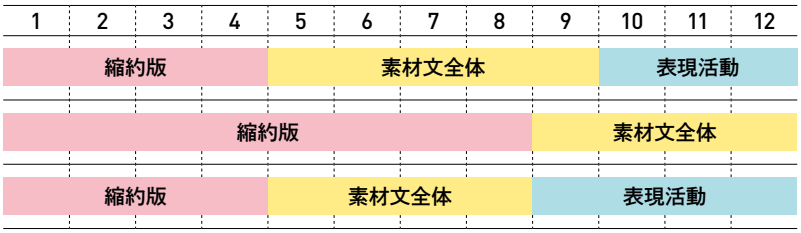
現在「シン 三本木メソッド」として、単元計画を学力層に応じて変えることを検討中です。本校には、普通コース（4クラス）とGS（グローバルサイエンス）コース（2クラス）があります。普通コースでは、基礎力の向上を図るために、縮約版を用いた学習に時間をかける一方、GSコースでは、中盤に行う素材文全体の読解の授業時数を減らして、難易度を上げやすい後半の表現活動を増やすといった構成です（下図）。単元計画の弾力化を図り、幅広い学力層に対応した指導をしていきたいと考えています。

■学力層に応じた「シン 三本木メソッド」（1単元12時間の場合）

縮約版
- Key Phrase Check
- 様々な音読練習　• Retelling

素材文全体
- Scanning　• Sentence Hunt
- Listening　• Homework Sheet　など

表現活動
- One-Minute Presentation
- Interview　• Subject Study　など



※学校資料を基に編集部で作成。

成果と展望

英語好きが増え、入試での得点も向上。課題は新学習指導要領への対応

「三本木メソッド」を始めてから、英語が好きになったという生徒の声をよく聞きます。国際系学部や英語科の教師を目指す生徒、海外で研究したいという生徒も増えました。

センター試験の時代から本校の英語の点数は他教科より低い傾向にありましたが、現在は他教科と同等の成績を上げています。英語4技能検定「GTEC」の結果でスコアが低い技能があれば、指導の偏りと捉えて学年全体で課題を共有し、4技能がバランスよく伸びるよう、指導を強化しています。

課題は、より新学習指導要領に対応した授業スタイルを確立することです。学習評価の精度の向上や幅広い学力層に対応した「シン 三本木メソッド」の確立（**コラム参照**）などにより、新たに求められる力に対応した指導を追求していきます。